

ルネサンス

これから待ち受ける不条理への悲しみか、泣き叫ぶ生誕。見るもの全てが輝いて見える幼少。自我の芽生えと他への反骨心から不満を募らせる青年。その全てが適当にどうしても良くなり落ち着くその後。

23歳からの4年間のフランスで、私はもう一度生まれた気がする。

渡仏初期。解りたいことも解らない、言いたいことも言い表せない。苦しくて悲しくて泣きながら何度日本へ電話したことか。時差のせいで夜中の2時頃に起こされる母。ごめんね。娘の夜泣きで寝られない、といったところか。

数か月後。できることも増えてきたから、いろいろなことに挑戦する意欲も出てニマニマしながら過ぎていく。異質の文化も、「知らないことを知る喜び」と捉え、とりあえず真似てみる。汚い言葉を乱発して「背伸び」をして喜ぶ様は、幼少期の母語の修得においても同じことが言える。おそらく言語・文化修得が一番「伸びる」時期であるから、一種の万能感に酔いしれる。

二年目くらい。一番生きづらい反抗期の到来。それなりの知恵もつき、「知る」は「考察する」となる。目の前の異質を素直に受け入れられず、やたら「ジブン」に拘り、他を否定する。日本人のジブン、フランスを知ったジブン。文句ばかり言っていた気がする。フランスでの生活対しても、日本での生活に対しても。

三年ほど経つ。成る。何とか成る。何かに成る。「ジブン」に拘らなくても、自然と存在できるように成る。良い意味で「だましだまし」を会得する。

フランスで出会った日本人留学生の多くは半年から一年で帰国していたが、私は、可能ならば、複数年滞在してみることをお勧めしている。もう一度生まれた気になれば、一度の人生二度おいしい、となるはずだから。

(博士課程 矢野禎子)

